

## 大坂の流行歌に関する一試論

## — 弘化・嘉永期（1844～1853）を中心に —

黒川 真理恵

## はじめに

近世後期、江戸・大坂・京都では、多くの流行歌の詞章本が出版された。詞章本は、音曲の詞章を記した本で、唄本あるいは歌本とも呼ばれる。流行歌の場合、小本（150×110 mm）あるいは中本（180×120 mm）で、丁数は二～四丁のものが多い。表紙（一丁表）には題字と絵が描かれ、版元の名前と、作詞者の名前が記されていることもある。本文は、表紙の裏（一丁裏）から始まる。多くの場合、刊年は記されていない。

上方の流行歌についての先行研究には、萩田清「上方の咄家と天保・幕末期の流行唄—薄物の唄本より—」（『芸能史研究』92・93号、1986年）がある。上方の場合、噺家による作詞が行われており、噺家の活動期と詞章本の内容から、出版年代は天保から嘉永期に推定される。

江戸の流行歌については、ジェラルド・グローマー『幕末のはやり唄—口説節と都々逸節の新研究—』（名著出版、1995年）がある。流行歌を出版した版元のうち、吉田屋小吉に焦点を当て論じている。

京都では、阿波屋定次郎が流行歌を多く出版した。阿波屋の詞章本は、これまでのところ105点確認することができる。出版年代は、文化・文政・天保期の約30年間に及ぶ。

弘化・嘉永期頃の大坂では、旋律は、大津絵節、よしこの節、伊予節、とつちりとんなどに固定化されたようである。内容は、物尽しが多く、そのなかでも芝居や役者を題材にしたものが多い。

本発表では、大坂で出版された流行歌の詞章本を取り上げ、流行歌研究の一試論を提示することを目的とする。初めに芝居と流行歌の関わりについて述べ、次に歌謡における物尽しの系譜を辿り、最後に詞章本の生産過程について考察する。芝居を題材にしたものの例として「とてつるてん節」を、物尽しの例として「道具尽しとつちりとん」を挙げる。

## 1. 芝居と流行歌

## 1-1 とてつるてん節

図版1は、「とてつるてん節」の詞章本の表紙である。小本、四丁である。表紙は絵表紙となっており、本文

は一丁裏から始まる。内容は、芝居尽しである。第五節以降は省略した。一部、平仮名は漢字に改めた。

「とてつるてん節」

[表紙]

申年三月大新板 松屋町通二ツ井戸南わた正板  
中の二の替り／当り狂言／曾我文句／平井権八／  
鈴が森の段／并ニ女夫尽し／恋文句いろいろ／  
とてつるてん節／新替歌

加津羅月人選

[第一節]

平井権八 鈴が森の段  
国は因幡の鳥取で お江戸をめがけて鈴が森  
悪党らをみな一々に切ましょ。  
じゃんじゃかじゃかじゃか 若輩な  
権八手の内あつぱれと。  
ほめたる幡随とてつるてん。  
花川戸へサアきなせ。まいりましょ

[第二節]

これより女夫尽し お染久松  
色にお染は野崎村。会いに北やら南やら。  
よい手がたの観音さんへ参りしょ。  
じゃんじゃかじゃかじゃか いけんな。  
革足袋ふり上久作が。  
あづける久松とてつるてん。  
蔵の中へサアきなせ。まいりましょ。  
ちよんがよやさで。すちやらかちゃん

[第三節]

梅川忠兵衛  
恋の飛脚の色里で。思い切ったる封印で  
金為替の盗賊になりましょ。  
ざんざかざんざと雪つもる。  
忠兵衛梅川手を引いて。  
大和路さしてとてつるてん。  
生まれ在所じゃ。サアきなせ。まいりましょ

[第四節]

中の芝居二ノ替大当り曾我文句替歌  
中の芝居は曾我の芸。工藤は大五郎井筒屋は。  
十郎で五郎は海老蔵で当たります。

お家殿およしも七ツ起き。  
 かねつける身仕舞いする  
 長吉は。弁当負い負いとてつるてん。  
 始まり早いぞ。サアきなせ  
 [第五節] 小稲半兵衛近江八景  
 [第六節] お俊伝兵衛猿回し  
 [第七節] お半長右衛門

第一節は「平井権八鈴が森の段」を題材にしている。第二節以降は女夫（めおと）尽しで、芝居で有名なカップルを題材にしている。各節「お染久松」「梅川忠兵衛」「小稲半兵衛」「お俊伝兵衛」「お半長右衛門」となっている。すべての節に共通する詞章は、「じゃんじゃかじゃかじゃか」「とてつるてん」「サアきなせ」「まいりましよ」という部分である。この部分が、「とてつるてん節」に固有の詞章である。「じゃんじゃか」の部分は、「ざんざかざんざと雪つもる」のように、変化している場合もあるが、構成は同じである。

第四節は、他の節と比べて特殊な構成になっている。まず、題材がカップルではなく、曾我狂言である。また、「とてつるてん節」の固有文のうち、「とてつるてん」「サアきなせ」はあるが、「じゃんじゃかじゃかじゃか」「まいりましよ」が入っていない。このように、他の節とは異なるのだが、実際に上演された芝居を題材にしており、年代特定の手掛かりとなるため、詳しく取り上げる。

第四節冒頭「中の芝居」とは、大坂の芝居小屋「中の芝居」のことである。「二の替」は正月に上演される芝居で、「曾我の芸」は曾我狂言のことである。江戸では、毎年正月に上演されていた。「工藤は大五郎」「井筒屋は十郎」「五郎は海老蔵」というのは、役名と役者を示している。「工藤左衛門」は「三柘大五郎」、「十郎」は「井筒屋」おそらく「実川延三郎」、「五郎」は「市川海老蔵」を指している。

以上、大坂「中の芝居」、正月、曾我狂言、配役のすべての条件を満たす芝居を探すと、嘉永元年（1848）正月、大坂中の芝居「けいせい曾我鎌倉集（そがかまくらだいじん）」が該当する。このときの配役は、初代実川延三郎、四代目三柘大五郎、五代目市川海老蔵だった。五代目市川海老蔵というのは、七代目市川団十郎のことである。当時、海老蔵は、天保の改革によって江戸追放となり、上方で活動していた。嘉永元年は、その時期にあたる。

詞章本の表紙は、この「けいせい曾我鎌倉集」を描いたものである。左下に描かれているのが五代目市川海老蔵、右上が初代実川延三郎である。海老蔵の場合、

目の力強さに特徴がある。延三郎は、頬に一筋の線が描かれる。どちらも似顔になっている。

また、嘉永元年は申年である。表紙に「申年三月大新板」とあるのは、「嘉永元年三月」に出されたことを示している。これによって、唄本の出版年代が特定された。

第四節のうち、前半部分は曾我狂言の評判について記されているが、後半部分は芝居見物にでかける人々について記されている。「お家殿およしも七ツ起き」とあるが、「お家殿」は商家の女将さんを意味し、「およし」は下女によく用いられる名前で、特定の人名を指すものではないと思われる。「鉄漿（かね）つける」というのはお歯黒をすることである。つまり、女将さんも下女のおよしも、早起きをしてお化粧をする、ということである。「長吉は弁当負い負い」の長吉は、丁稚によくある名前である。丁稚の長吉は弁当を背負ってという意味である。芝居へ出掛ける人々の浮き立つ様子が描かれている。

## 1-2 とてつる拳

「とてつるてん節」には、元になった歌がある。前年の弘化4年（1847）の芝居歌「とてつる拳」である。「とてつる拳」は、弘化4年正月に江戸の河原崎座で上演された「笑門俄七福（わらうかどにわかしのちふく）」の劇中歌である。出演は、二代目市川九蔵、六代目松本幸四郎（錦升）、四代目中村歌右衛門である。太鼓持（幫間）二人（九蔵）（錦升）のところへ、別の男（歌右衛門）が自分も太鼓持になりたいと言ってやって来る。太鼓持になるには、なにか芸ができなければならぬというわけで、拳遊びを披露することになった。それが「とてつる拳」である。原曲は常磐津である。以下に詞章を掲載する。

### 「笑門俄七福（とてつる拳）」

常磐津文字太夫直伝、作者三代桜田治助  
 (『日本歌謡集成』第10巻「常盤種」より)  
 時に四ツイ湯の番衆  
 きさま太鼓持になる気なら 何ぞ芸が有らふネ  
 イヤモウ有るだんか芸はいろいろ有る  
 一寸した所が拳だね  
 何に拳だハアどんな事をやる  
 見てへものだ サアサア早く早く  
 さらば見せよふ ヨイヨイヨイヨイ  
 (\*) 酒は拳酒色品は  
 蛙一トひよこ三ひよこひよこ  
 蛇ぬらぬらなめくで参りやしよ  
 ソレじゃんじゃかじゃかじゃかじゃん拳な

婆さまに和藤内がしかられた  
 虎がはうはうとてつるてん  
 狐でサアきなせ  
 ヤなるほどこいつは面白い  
 何と負けた者を頭をはるのはどふだ  
 よふごんすその時に腹を立つ事はならぬぞ  
 よしよしそんなら三人一緒にヨイヨイヨイヨイ  
 (\*) 繰り返し  
 サアきなせ サアきなせ サアきなせ  
 ア、コレコレ待たんせ待たんせ お前方はわしが  
 負けても勝っても 無性に頭をくらせるで  
 モウモウ 拳はいやだ 帰ります

詞章には、拳遊びが読み込まれている。虫拳（蛙、なめくじ、蛇）、虎拳（虎、婆様、和藤内）、狐（狐、庄屋、獵師）で、それぞれ三すくみの拳遊びとなっている。

「ジャンジャカジャカジャカ」「とてつるてん」「サアきなせ」の部分は、「とてつるてん節」と一致する。このことから、「とてつる拳」は「とてつるてん節」の元歌と考えられる。さらに、風聞雑記『巷街贅説（こうがいぜいせつ）』には、「とてつる拳」の流行に関する記述がある。

『巷街贅説』巻之五

（『続日本随筆大成』別巻10より）

○流行

ことし未の春より流行するとてつる拳じゃんじゃがぶし、  
 酒は拳酒色品は、  
 藁一トひよこ三ひよこひよこ、  
 蛇ぬらぬらなめくで参りましょ、  
 すちやらかちゃん、ソレ  
 じゃんじゃらじゃらじゃら じゃん拳な、  
 婆様に和藤内がしかられた、  
 虎がはうはう、とてつるてん、  
 狐でサアきなせ、まいりましょ、  
 チョチョンガよやさ、  
 此戯れ拳は、猿若町三町目なる河原崎権之助が芝居にて、三代目中村歌右衛門、六代目松本幸四郎、市川九蔵にて、舞台にて致せし由、一枚絵にも摺出し、追々に替歌出来て、専らの流行とはなりぬ

「ことし未の春」というのは、弘化4年のことである。「三代目中村歌右衛門」とあるが、当時は四代目だったはずである。「じゃんじゃかぶし」が「じゃんじゃ

がぶし」、「じゃんじゃか」が「じゃんじゃら」というように、芝居歌とは異なる部分もある。

弘化4年、江戸河原崎座で上演された「とてつる拳」は、一年後「とてつるてん節」として大坂で流行した。「じゃんじゃかじゃかじゃか」「とてつるてん」「サアきなせ」「まいりましょ」の部分は残り、ほかは替歌が作られた。大坂の「とてつるてん節」は、芝居で馴染みのカップルを題材にし、中之芝居で上演された曾我狂言を歌い込んでいる。江戸の芝居から誕生した歌が、大坂へ広まり、さらに当地の芝居の情報を取り込んでいったといえるだろう。

2. 物尽しと流行歌

物尽しは、ある共通性を持つ語句を列挙する手法である。文学全般における物尽しを論じた先行研究には、ジャクリーヌ・ビジョー『物尽し—日本のレトリックの伝統—』（寺田澄江；福井澄（訳）、東京、平凡社、1997年）がある。早歌については、外村南都子「早歌における物尽しの展開」（『国語と国文学』81巻12号、2004年）がある。

歌謡において、物尽しは伝統的に用いられてきた。おおよそ12世紀頃まで遡ることができる。『梁塵秘抄』では「山尽し」、『閑吟集』では動詞「引く」にまつわる物尽しの例がみられる。

『梁塵秘抄』治承3年（1179）巻2・345

（『新日本古典文学大系』56）

山尽し「勝れて高き山、大唐唐には五台山、靈鷲山、日本国には白山天台山、音にのみ聞く蓬萊山こそ高き山」

『閑吟集』永承15年（1518）152

（『新日本古典文学大系』56）

引く尽し「引く引く引くとて鳴子は引かで、あの人殿引く、いざ引く物をうたはんや、いざ引く物をうたはん、春の小田には苗代の水引く、秋の田には鳴子引く」

近世期になると、物尽しのみを集めた歌謡集が作られるようになる。18世紀初め頃の流行歌『踊口説集』には、「尽し物八種」が所収されている。そのなかのひとつに虫尽しがある。

『踊口説集』宝永年間（18世紀初）

（『日本歌謡集成』7）

虫尽し「誰も迷ふは色里の路、黄金虫をば大分費ひ、親は勘当きりぎりす、鳴くや藻汐の

寒かりし夜も、蠅ななりかや素紙衣一重、  
女郎蜘蛛にぞ会はんと思ひ、廓町へと来  
ごとは来たが、くつわ虫こそよに荒けな  
や、それに遣手がかまきり虫で、客の障  
りと蜂払ふよに、叩き出せど我が蓑虫を、  
恨めよよりかは泣く泣く蟬の、蟬の衣の  
縁薄くとも、時節松虫またこほろぎよ、  
蝶か花かと世に大切な、遊女の姿をみみ  
ずと思ひ、身をば焦する螢の虫よ、兎角  
恋には歌を出せさ

虫の名前を読み込んだ、恋物語である。全体に物語性を持たせているところが、これまでになかった物尽しの特徴である。弘化・嘉永期の大坂の流行歌は、この特徴をさらに特化させている。図版2は「道具尽しとっちりとん」の詞章本の表紙である。

「とっちりとん」

[表紙]

大坂松屋町筋二ツ井戸南わた正板  
新替り文句／道具尽し／とっちりとん／上ノ巻  
桂文東戯作

[第一節]

座敷行燈の不足を聞けば、昼は押入れに放り込まれ。そこにいるかと問もせで。かたや箒と相住まい 日暮れにそろそろ呼び出され。家内を照らす役を受け。知れぬ草履を教えたり。引っ提げられたり夜が更けりや。ふたりのそばが辛い役

[第二節]

中のよいのは硯と墨よ 初めは互いに思へども。  
あかしてこうとゆゑんすみ 筆にいはしてやる文に 人が浮名を高嶋や。茶々を入れても水入れても 心とこゝろがうちあふて 得心づくで苦勞する。  
今ではひとつの箱の内

[第三節] 火鉢

[第四節] たらいの喧嘩

[第五節] 八方の自惚れ

[第六節] ほうきの小言

行燈、硯、火鉢、たらい、八方、箒といった、生活に身近な道具を題材にしている。単に列挙するだけでなく、一節ごとに物語を与えている。例えば第二節では、硯と墨を題材にして、夫婦に見立てている。あるものを別のものに「見立て」ることは、近世後期流行歌の特徴のひとつではないだろうか。

### 3. 詞章本の流過程について

#### 3-1 作詞者について

詞章本の作詞者の欄には、噺家の名前がみられる。林屋木鶴、花枝房圓馬、司馬才治郎、秋亭菊枝、桂文當、亀村寅光、笑福亭吾竹、染川翫楽、林屋正翁、藤川梅枝、湊谷猪之吉、都歌楽、桃の屋馬一らがいる。

林屋木鶴（図版3）、花枝房圓馬（図版4）、司馬才治郎（図版5）については、詞章本の表紙に姿が描かれている。司馬才治郎の場合、三味線を手にしており、弾き語りをしていたようである。「江戸」とあることから、元来は江戸で活躍した芸人だったようである。林屋木鶴、花枝房圓馬の場合、見台を前にして描かれ、手には扇子を持っている。寄席で演じられたものと思われるが、上演実態については今後の課題とする。

#### 3-2 版元について

流行歌を出版した版元でよくみられるのが、和田屋正兵衛（わた正）と丹波屋権兵衛（たん権）である。和田屋正兵衛は、流行歌のほか芝居番付を多く出版した。芝居に近い関係にあったことがうかがえる。

#### 3-3 出版時期について

流行歌の詞章本には、通常、刊年が記されていないため年代の特定が難しい。しかし、芝居を題材にしているものは、芝居の上演記録を手掛かりとして特定することができる。

「とてつるてん節」の場合、嘉永元年正月に曾我狂言が上演され、その二ヵ月後の3月に詞章本が出された。話題性、時事性を取り込んだ一例といえるだろう。



報告者の発表風景

#### おわりに

大坂の流行歌の詞章本は、芝居関係の版元によって出版され、その内容も芝居を題材にしたものが多い。噺家によって作詞されており、寄席で演じられたようである。

実際に大芝居をみることができないような人々も、

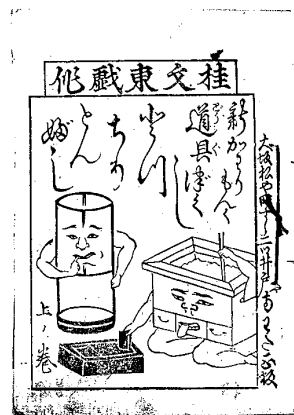
寄席にでかけることによって、または、詞章本を手にするによって、芝居の情報を得ることができたのではないだろうか。大芝居を発信源とした情報の波及については、今後さらに検討したいと思う。

最後に、流行歌研究について、歌謡、芝居、話芸、出版など、様々な側面からの研究の可能性を示唆してまとめとする。

くろかわ まりえ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻



図版1 「とてつるてん節」  
(大阪府立中之島図書館蔵)



図版2 「道具尽し とっちりんと」  
(大阪府立中之島図書館蔵)



図版3 「林屋木鶴」  
(大阪府立中之島図書館蔵)



図版4 「花枝房圓馬」  
(大阪府立中之島図書館蔵)



図版5 「江戸 司馬才治郎」  
(大阪府立中之島図書館蔵)